

【尾道企業家列伝～尾道ゆかりの先人企業家たち】

中世の時代から商港都としての歴史を刻む尾道は、古くから商人が活躍してきた町であり、とりわけ江戸時代後半から近代にかけては、豪商と呼ばれる大商人も多く登場しました。そうした商業盛んな商人の町としての風土は、また一方で、尾道から大きく世に羽ばたく企業家（会社の経営者）を多く輩出しています。

大なる志を立てて尾道から旅立ち、商都大阪で勤勉・誠意・努力奮闘によって大実業家へ雄飛し、その莫大な富を、故郷尾道では上水道敷設という一大公共事業で還元した山口玄洞（旧尾道出身。尾道市名誉市民）…

玄洞同様、若くして大阪へ出て丁稚奉公に励み、独立起業後は水道送水管の製造に独力で挑戦し、研究努力の末に国産化に成功、後に農業・工作機械で有名な「クボタ」創業者となる久保田権四郎（因島出身。尾道市名誉市民）…

明治の時代、蚊取り線香の原料となる除虫菊栽培の普及に努めて全国を駆け回り、向島でも種苗を無料で配り、島内での栽培と普及を啓発、その功績を称える頌徳碑を千光寺公園に遺す、金鳥でお馴染みの大日本除虫菊株式会社創業者の上山英一郎…

尾道に生まれ、各地を点々と流れた末に、“造船の島”となりつつあった因島に落ち着き、造船の下請業から旅館業、現在のホテル・ナティーク城山の前身となる城山倶楽部の経営を手掛けるなど、当地方における女性経営者の先駆けとなった男装の女傑・麻生イト…

小さな鉄工所で人一倍汗を流し、当時は目新しい酸素溶接という新技術を習得せんと大阪へ出、へこたれない不屈の精神と並々ならぬ努力でこれを習得、工場創業後も熱心に研究を続け、新製法を發明して2つの特許、3つの実用新案を獲得した耕三寺耕三（後に瀬戸田に耕三寺を開いた。尾道市名誉市民）…

教師から一転して久保田権四郎の下で働き、権四郎同様の研究熱心さでメキメキと頭角を現し、見込まれて久保田鉄工所（現クボタ）3代目社長に就任、クボタ中興の祖と仰がれると共に、大阪商工会議所会頭として地域経済にもその手腕を発揮した小田原大造（向東出身）…

本展では、そうした尾道出身、或いは尾道にゆかりある先人企業家の生涯と業績を採り上げ、企業家（起業家）精神（アントレプレナーシップ）の高揚を促すと共に、その高い志とチャレンジ精神、創意工夫、努力と困難を克服する勇気と英知を、とりわけ児童・生徒の皆さんに学びとって頂ければと思います。



本企画展で取り上げる先人企業家（左から山口玄洞、久保田権四郎、上山英一郎）

【巨万の富を社会へ還元～山口玄洞】



1863（文久3＝江戸後期）年 - 1937（昭和12）年
株式会社山口玄（大阪市）創業者 尾道市久保町出身

千円で家が建つ時代に、103万5千円という金額は途方もないほど莫大なもの。それを尾道の為にボンと出したのが、水の恩人として市民に親しまれている尾道市名誉市民の山口玄洞。

維新の足音迫る幕末の1863（文久3）年10月10日、久保町（現在の久保2丁目）の医師・山口寿安と母・節の長男として、山口玄洞、本名・山口謙一郎は生まれました。

謙一郎9歳の時、愛媛県岩城島の漢学塾「知新館（知新学校）」へ入学しますが、家の暮らしは豊かでなかった為、父・寿安は嗜んでいた酒を断って、何とか学費を工面したというエピソードを伝えます。

1877（明治10）年、謙一郎のもとへ思いも寄らぬ突然の訃報がもたらされました。父が亡くなったというのです（享年45歳）。尾道へ飛び帰った謙一郎は、残された母と四人の弟・妹の生活を支えるべく、学業をあきらめ、荒物（ほうきやバケツといった生活雑貨）を荷車に積んで行商に歩きました（この時、謙一郎15歳）。

貧しい人からは診療代を受け取らなかつたり、副業で商っていた醤油を無料で持って行かせるなどして、慈父（じふ）のように慕われていた父であったため、町の人々の同情を得て何とか生活はしのげました。しかしこんなその日暮らしの生活では未来に希望は持てないと、母を説得して、商都大阪へ旅立つ事を決心します。父の死から一年、謙一郎16歳の時でした。

大阪へ出て来た謙一郎は、心齋橋にあった土居善洋反物店に勤め、店では「清助（せいすけ）」と呼ばれ、とにかく熱を入れて仕事に取り組みました。そんな仕事に熱中する性格（手を抜かずとことんやるタイプ）をかわれ、店主や得意先の評判・信頼は上々でした。

しかし2年後に店が倒産してしまい、ここに独立起業の契機を迎えます。

1882（明治15）年、伏見町（現在の大阪市中央区）の一角に、間口一間半（4畳半）の小さな店を借りて、洋反物仲買業「山口（清助）商店」を創業しました。尾道を出てから4年、謙一郎20歳の時でした。

社史によれば、創業当時の店には1円20銭の帳簿（商店に用いるタンスで金庫としても機能した）、ソロバン、長帳（取引を記した記録簿）の3点の備品しかなく、資本金も持たなかったといえます。

「信用第一」で、誠実な対応に心掛けた謙一郎の奮闘ぶりは凄まじく、昼は注文取りに回り、夜は注文品の整理と荷造りで、気づけばもう朝だったという事も日常茶飯事でした。社史はその様な生活を、「戦場同様」と表現しています。

1892（明治25）年、謙一郎30歳の時、英国商社によって毛織物のモスリン生地が輸入され、これが飛ぶように売られていました。大問屋はこれで大儲けしていましたが、山口商店を含む中小の問屋は生地の入手に苦労していました。

そんなある日、モスリン生地を満載してやって来たイリス商社の船が大風雨に遭い、生地は海水に浸り、誰も買い手がつかない事態となりました。困り果てているイリス商社に対し、謙一郎

はせっかく日本まで持って来られて気の毒であると、全て自分が買い取ると名乗りを挙げました。

工場に頼み手間と費用をかけて何とか売り物にしましたが、もちろん儲けはありませんでした。大問屋の商人達は馬鹿な事をする、謙一郎の慈善的行為を皆笑いました。

骨折り損のくたびれ儲け...商人として大失敗と思われた謙一郎のこの行為は、その後思いもよらぬ展開を見せるのです。謙一郎に恩を感じたイリス商社は、モスリン生地を今後は山口商店にのみ販売すると言って来たのです。モスリン生地は山口商店の専売となって、一流問屋へと一気にのし上がる事になったのです。

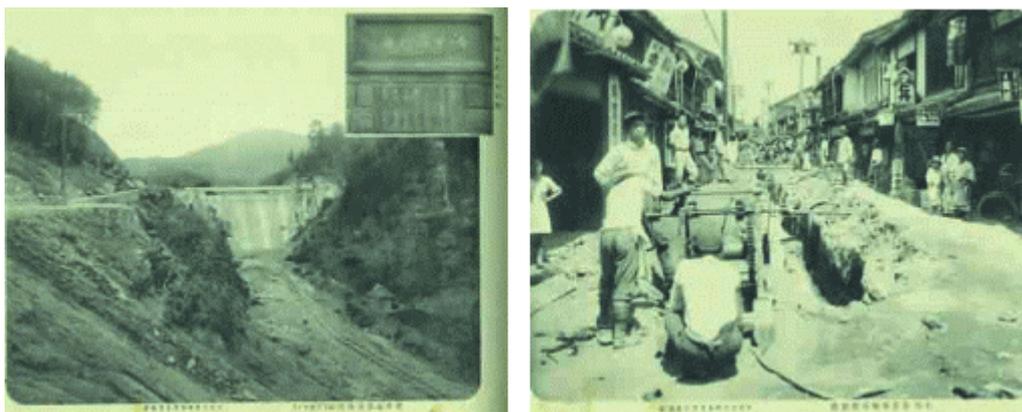
1896(明治29)年、34歳になった謙一郎は、ようやく自分もいっばしの商人になる事が出来たと、山口家代々で続く"玄洞"の家名を襲名します(4代目山口玄洞)。謙一郎、清助、改め山口玄洞の誕生です。

努力奮闘と妻や優秀な幹部たちの支えによって、会社は飛躍的發展を遂げましたが、同時に、最高経営責任者として、玄洞の仕事量は激務の域に達していました。睡眠も満足にとれない有り様で、これが祟って健康を害し、1917(大正6)年、引退を決意します。

この後、会社を資本金100万円をもって株式会社化させ、長年發展に貢献してきた上級役員に後事を託し、京都の本邸で静養生活に入りました(玄洞56歳の時)。

玄洞は一代で築き上げた巨万の富を、惜しげもなく社会へ還元する事に努めました。困窮している人の為、教育の為、医学・医療の為、地域の為、社寺の為と、多方面にわたって尋常ではない程の金額を寄付し続け、故郷である尾道では、尾道南高校の前身となる「明德商業高校(尾道市実業補習学校～尾道商業実務学校を経て)」の新築・運営資金、尾道女子高等小学校の新築資金、墓所のある西國寺の水家建立、そして全国的にも最大規模となるのが、1922(大正11)年の上水道敷設への資金提供でした。

1925(大正14)年に完成を見る尾道市上水道敷設事業へ投じられた103万5千円という額は、実に総事業費の4分の3を占め、現在のお金に換算すると数百億円にも上ります。それが玄洞個人の手によってまかなわれたのです。



水源地建設工事と長江水道敷設工事の写真

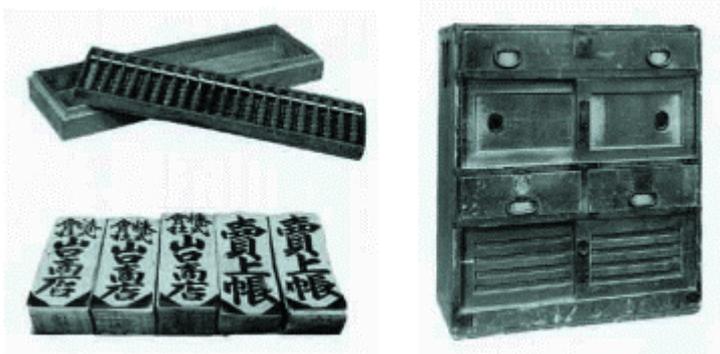
【山口玄洞の主な社会還元・社寺への寄進(一部)】

- ・ 尾道市女子高等小学校新設資金 1万円 明治34年
- ・ 西國寺(尾道市)水家 明治34年
- ・ 大阪市船場小学校の新築費用 1,000円 明治35年
- ・ 日本赤十字社へ1,800円 明治41年

尾道商業会議所記念館 第 11 回企画展「尾道企業家列伝～尾道ゆかりの先人企業家たち～」

- ・ 早稲田大学の基本金 2,500 円 明治 43 年
- ・ 慶応義塾医化学科設立資金 1,000 円 大正 5 年
- ・ 米価暴騰に際して大阪市へ 2 万円、京都市へ 5,000 円 大正 7 年
- ・ 兵庫県などの暴風雨被害義援金 1,000 円 大正 7 年
- ・ 財団法人山口厚生病院設立資金 100 万円 大正 7 年
- ・ 京都帝国大学に山口奨学資金 3 万円 大正 9 年
- ・ 尾道市実業補習学校設立経営基金 13 万円 大正 9 年
- ・ 尾道市実業補習学校改め尾道商業実務学校の基金 5 万円 大正 11 年
- ・ 尾道市上水道敷設資金 103 万 5 千円 大正 11 年
- ・ 松禅院（比叡山延暦寺山内）本堂改築、庫裏新築 大正 11 年
- ・ 知恩寺修道院（京都市百万遍）本堂・表門新築 大正 11 年
- ・ 関東大震災救援金 1 万円 大正 12 年
- ・ 方広寺（静岡県）の三重塔・大客殿新築 大正 12 年
- ・ 片山病撲滅組合（広島県）へ 1,000 円 大正 13 年
- ・ 山口仏教会館（京都市）を設立し、維持金として 30 万円 大正 13 年
- ・ 龍翔寺（京都大徳寺山内）本堂・禅堂・庫裏・茶室・待者寮・表門等新築 大正 14 年
- ・ 比叡山横川に多宝塔新築 大正 14 年
- ・ 奥丹後震災義援金 1,000 円 昭和 2 年
- ・ 仏通寺（三原市）多宝塔新築、十一面観音像奉納、青銅製聖観音像建立 昭和 2 年
- ・ 京極幼稚園（京都市）改築費中へ 1,000 円 昭和 3 年
- ・ 京都府立第一高等女学校図書館へ 1,000 円 昭和 3 年
- ・ 醍醐寺（京都市）大伝法院の大講堂、総門、弁天堂、地藏堂、不動堂、阿闍梨堂、鐘楼、庭園など一切を新築 昭和 5 年
- ・ 大阪帝国大学微生物病研究所設立基金 20 万円 昭和 6 年
- ・ 大阪帝国大学微生物研究会資金 5 万円 昭和 8 年
- ・ 北海道函館火災義援金 1,000 円 昭和 9 年
- ・ 神護寺（京都市高雄）金堂新築、多宝塔新築、龍王神堂新築ほか 昭和 9 年 ほか

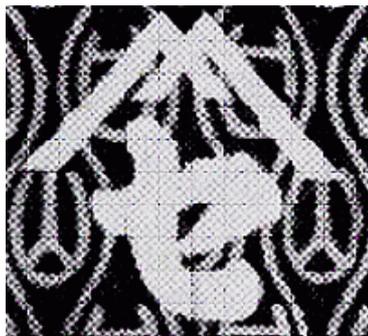
【創業時の 3 点の備品】



創業時の 3 点の備品（社宝）

ソロバン、長帳（取引を記した記録簿）、帳筆筒（商店に用いるタンスで金庫としても機能）

【山口商店のはんてんにあるトレードマーク「山セ」のいわれ】



山口商店のトレード・マークとなった【山セ】 - 「山」は山口、「セ」は清助(せいすけ)で、山口玄洞が丁稚奉公時代、山口清助と呼ばれていたことにちなむ。独立起業当初は「山口清助商店」であった。(人物伝文中参照)

【山口商店のはんてん(複製)(個人所蔵) 展示資料】



【発明企業家～久保田権四郎】



1870（明治3）年 - 1959（昭和34）年

株式会社クボタ（大阪市）創業者 尾道市因島大浜町出身

農業機械・鉄管などで有名な企業「クボタ」（本社・大阪市）創業の父が、因島大浜に生まれた久保田権四郎（旧姓・大出）です。

権四郎は子どもの時分より起業家精神に満ち溢れ、瀬戸内海を行き交う蒸気船を眺めては、いつかは自分の手であんな船を作り出したいと思っていました。

貧しい農家で苦勞していた両親を楽にしてやりたいと、15歳で大阪へ丁稚奉公に出ました。そこで真面目に根気強く働き、その間にコツコツと貯めた資金を元手に、19歳で秤の分銅などを製造する「大出鋳物」（後、大出鋳造所）を創業しました（店は大阪市南区、現在の中央区）。

1897（明治30）年、それまで国内では技術力が足らず、外国製の輸入に頼るしかなかった水道送水の鋳鉄管（合わせ目のない大型の直管の水道管）の製造研究に、権四郎は独力で挑みました。研究に研究を重ね、何としてもこの手でやり遂げるという熱意と努力が実り、遂に立込丸吹鋳造法を発明し、水道送水管の初の国産化に成功したのでした〔3年後の1900（明治33）年に実用化〕。

やがて、外国産に負けない鋳鉄管が大量生産されるようになり、大阪、東京の水道管・ガス管として広く普及していきました。それによって会社が大きく成長していく中、取引先であった久保田藤四郎氏から望まれて養子になり、以後、「久保田鉄工所」（現在の株式会社クボタの前身）に社名が改められました。

鋳鉄管から事業は更に拡大して、農業機械、工作機械などの製造も手掛け、満州久保田鋳鉄管、尼崎製鉄などのグループ会社を擁し、従業員2,000人規模の大企業へと成長していきました。

1919（大正8）年には、実用自動車製造株式会社を設立して自動車製造にも進出しますが、こちらは思うような成果を上げるまでには至りませんでした。ちなみにこの実用自動車製造と合資会社ダット自動車商会の合併によって設立された「ダット自動車製造株式会社」は、現在の日産自動車の母体となりました。

権四郎は実業家であると同時に発明家でもあり、70件の特許、実用新案は150余も獲得していました。子どもの頃、故郷の因島で蒸気船を眺めながら、いつかは自分の手で...という熱い思いを抱いていた権四郎の、たゆまないチャレンジ精神には見習うべきものがあります。

そんな自分を育ててくれた故郷因島に対して、山口玄洞に同じく故郷孝行を権四郎もしています。

本拠地である大阪においては、貧しい子ども達の為に設立された私立徳風尋常小学校を支援し続け、因島においては、出身地である大浜町から、中庄町、重井町を中心に、学校の建設や道路の整備といった公共事業に私財を投げうっています。

そういった権四郎の功績を讃える記念碑が島内に数々見られ、2003（平成15）年には、因島の名誉市民に選定され、合併後は尾道市名誉市民に引き継がれています。

【久保田権四郎の地元に残る功績】

・ 大浜小学校と記念公園

1875（明治 8）年の開校になる歴史を持ち、1926（大正 15）年に現在地へ移転。久保田権四郎の寄附によって、旧校舎、講堂、敬老館が建てられました。学校統廃合により、2007（平成 19）年 3 月 25 日に閉校。敷地内には、遺徳を偲ぶ記念公園があります



・ 道路の建設

大浜町と中庄町を結ぶ海岸道路と道路開通記念碑。



・ 久保田橋

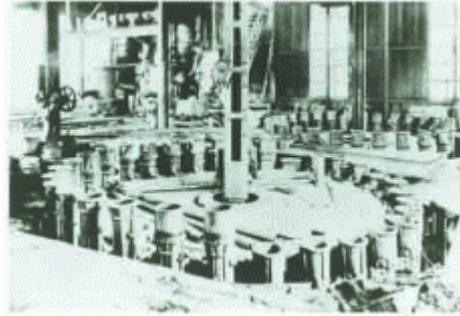
大浜町の海岸道路上に架かる久保田橋も、権四郎の故郷孝行のひとつ



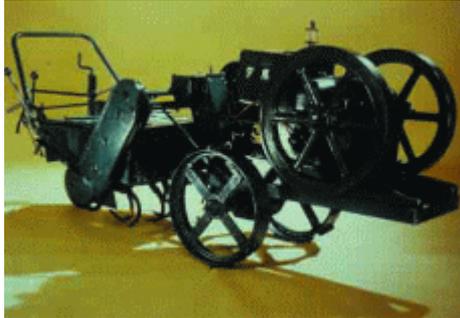
【関連資料（株式会社クボタ資料提供）】

「自分の魂を打ち込んだ品物を作り出すこと又其の品物には正しき意味に於ける商品価値を具現せしむること」 創業者 久保田権四郎

- ・ 1893（明治 26）年 水道用鑄鉄管の製造開始。



- ・ 1947（昭和 22）年 耕うん機を開発、製造、販売開始。



【蚊取り線香の発案者～上山英一郎】



1862（文久2＝江戸後期）年 - 1943（昭和18）年

大日本除虫菊株式会社（大阪市）創業者 向島町ゆかりの人物

金鳥の夏、日本の夏...のキャッチコピーでお馴染みの、蚊取り線香で知られるメーカー・金鳥こと大日本除虫菊株式会社創業者・上山英一郎を祭神として祀る神社が、全国で唯一「向島」にあります。その名も除虫菊神社といい、向島西村の氏神・向島亀森八幡神社境内に鎮座します。しかし何故ここ向島に、金鳥の創業者がお祀りされているのでしょうか？

和歌山県有田市のミカン農家に育った英一郎は、慶応義塾大学でかの福沢諭吉に学んだ後、郷里に戻り家業のミカンづくりをしていました。そして、福沢諭吉の教え（経済学的重要性）のもとに、和歌山ブランドであるミカンをもって海外貿易を商う上山商店を起業しました〔1885（明治18）年、22歳の時〕。

この年、英一郎を訪ねて一人のアメリカ人がやって来ました。恩師・福沢諭吉の紹介状を手に現れたその人物は、H.E.アモアといい、サンフランシスコで植物の輸入会社を経営する社長でした。聞けばアモア社長は、日本の珍しい植物を求めてはるばるやって来たのだといい、英一郎は自慢の柑橘と共に、竹や棕櫚（しゅろ）、秋菊などの苗を提供し、また双方で珍しい植物の種子交換を約束したのです。

翌年、アモア社長から贈られて来た様々な種子の内に、ビューハクなる除虫菊の種があり、「アメリカではこれで巨万の富を得た人は多い」との言葉が添えられていました。これは面白いものになるかもしれないと、除虫菊に大いに注目した英一郎は、以後、その栽培方法の研究に励み、1887（明治20）年、日本で初めて除虫菊の栽培に成功しました。

早速これを全国へ広め、日本の産業に貢献しようと、全国各地を駆け回って種を無料で配り、除虫菊栽培を教え説きました。なかにはインチキ扱いされた事もしばしばありましたが、めげずに各地を回り、その普及に努めました。

1890（明治23）年、瀬戸内海の島々を巡る中で、英一郎は向島を訪れます。向島でも除虫菊栽培をと呼びかけるも、誰も向き合う者は居なかったといいます。その中で唯一の協力者となったのが道越の村上庄平でした。こうして向島でも種が配られ、試験的栽培が始まったのです。その後は同西村の藤田歳太郎の手によって、向島での本格的な除虫菊栽培が展開されていきました。

気候的にも栽培に適した瀬戸内海地方では、以後栽培が盛んになり、とりわけ広島県と香川県地方が一大生産地となり、明治から戦前にかけて、当地方の島々を中心として産業振興に大きく貢献するに至りました。

除虫菊の啓蒙・普及に尽力した上山英一郎の功績を永く称えようと、1930（昭和5）年、地元有志の手によって「除虫菊発祥之地」を刻む頌徳碑が千光寺公園に建立され、また、向島では除虫菊神社に上山英一郎が神として祀られたのです。

【千光寺公園内にある除虫菊発祥の碑】

1930（昭和5）年、広島県除虫菊同業組合によって建てられた石碑。題字は日露戦争でその名

を知らしめた東郷平八郎、撰文は明治から昭和にかけて活躍した著名ジャーナリスト・徳富蘇峰というビッグ・コンビによる。手前のお堂は毘沙門天を祀った毘沙門堂。



絵葉書 戦前（千光寺公園 日本除虫菊始祖 上山英一郎翁碑） 尾道学研究会蔵

【向島の除虫菊神社】

除虫菊発祥之碑に同じく 1930（昭和 5）年、上山英一郎氏の遺徳を称え、向島町名郷丸の亀森八幡神社境内に祀られたもので、生前の上山氏を神として崇め祀った形になります。毎年 5 月上旬、金鳥の幹部役員らが列席して例祭が営まれ、2010（平成 22）年で 80 回目を迎えます。



除虫菊神社の例祭（写真提供：山陽日日新聞社）

【関連資料（大日本除虫菊株式会社資料提供）】

・ 金鳥の商標のいわれ

司馬遷によって編纂された中国史上初の歴史書「史記」のなかの「蘇秦伝」に、中国戦国時代の遊説家・蘇秦は、韓、魏、趙、燕、楚、齊の王たちに同盟を結び、秦に対抗すべきであると説き、「それぞれ小国であっても一国の王としての権威を保つべきだ。秦に屈服するな」ということを伝えるために、「鶏口と為るも牛後と為る無かれ」という言葉を引用しました。つまり秦に屈して牛の尻尾のように生きるよりも、小とは言え、鶏の頭（カシラ）になるべきであると、各国の王を説き、合従策を完成しました。この一節を信条としていた上山英一郎は、1910（明治 43）年「金鳥」の商標を登録しました。業界の先駆者として「鶏口」になるべき自覚と気概を持ち、品質をはじめ、あらゆる面で他より優れたトップの存在であることを願い、決して「牛後」となることがないように自戒を込めた決意にほかなりません。



・ 金鳥の歴史

蚊取り線香の手巻き風景（昭和 28 年頃）と海外向けポスター。



【久保田権四郎に関する文献（大浜公民館所蔵） 展示資料】

- ・ ふるさと（大浜町文化財協会刊）
- ・ 久保田権四郎翁 50 回忌法要 翁を偲ぶ（久保田権四郎翁 50 回忌法要実行委員会刊）